



若妻誘惑ハーレム

桃色町内会へようこそ!

大泉りか

挿絵／貞影

立ち読み版

KTC
KILL TIME COMMUNICATION

第一章	綾 飲み屋のフェロモンおねえさまに童貞を奪われて……………	4
第二章	早紀 欲求不満な美熟女キャリアウーマンと秘密の肉体会議……………	68
第三章	早紀×ひな しつとり人妻とロリーター女学生、ロストバージン3P……………	119
第四章	綾×早紀 パイズリと母乳とハメ潮と……………	165
第五章	よしみ 二十歳の若妻、初めての浮気セックス……………	215
第六章	綾×早紀×よしみ 三つの女体を独り占め！ 魅惑の人妻祭……………	253



奥宮大介

(おくみや だいすけ)

二十歳の大学生。祖父の入院に伴い、祖父母が経営していた酒屋を手伝うことになる。

青木よしみ

(あおき よしみ)

大介の高校時代の同級生。専門学校卒業後、すぐに結婚して桃色町へと嫁いできた。亭主関白な夫に従順に尽くしてはいるものの、心の底では不満を抱いている。

小原早紀

(おばら さき)

ビール会社の営業。キャリアウーマン風の妖艶な美人。忙しい夫とのすれ違いの生活と、セックスレスに悩んでいる。

竹下綾

(たけした あや)

奥宮酒店の近所に住んでいる巨乳のバツイチのお姉さん。一歳児の母親で面倒見がよく、昼は近所の弁当屋、夜はスナックで働いている。

岡本ひな

(おかもと ひな)

奥宮酒店の近所に住む高校生で、処女ながらエッチに興味津々。大介の祖父の話し相手だった。



「うふふ。ひなちゃん、なかなか上手よ」

「んっ、大介さんっ、わたし、こんな感じで大丈夫でしょうか」

「うん、早紀さんっ、ひなちゃんっ、俺、すっごい気持ちいいよっ！」

早紀の柔らかな唇が、ちゅっちゅっつと裏筋を吸い上げ、ひなが唾液をたっぷりとまぶした舌先で、亀頭の段を左右に擦る。清純な美少女と妖艶な美女が、慈しむように大介のペニスを貪る様は、ただでさえ、掛ける二倍の快感を、さらに倍増させる。

（うあっ、ヤバイ。ふたりがかりでこんなことされてるだなんて、夢みたいだ!!）

欲情の塊と化した剛直に、ひなと早紀の舌が行き来するたびに、ふたりの温かな唾が混じりあい、ちゅぷちゅぷと淫らな水音が耳の奥に響いて頭が痺れてくる。

（ううっ、早紀さん、本当にいやらしい顔でしゃぶるんだなあ。それにひなちゃんも、慣れてないのに、一生懸命な感じがエッチだ）

早紀を手本にするかのように、ひなは、視線をちらちらと早紀に向けては、その技を真似て大介に試してくる。早紀もひなの視線を意識しているのか、見せつけるようにわざと舌を大きく出して大介のペニスを舐っているのが卑猥だ。

「んふ。ひなちゃん、だいぶ慣れてきたわね。ね、今度はひとりでしゃぶってみる？大介くんのおちんぽを、お口の中に入れてあげて」

ひなは無言のまま頷くと、思いきったように大介のペニスをぱくりと啜えこんだ。とたんにぬるりと熱い粘膜に包み込まれたペニスがぶるりと震える。

(うわあっ、ひなちゃんの口の中、熱いっ！)

初めての経験に、身体の内側まで火照っているのか、口内粘膜は熱くじゅんじゅんとペニスを包み込んでくる。

「んっ、んぐっ、んちゅっ。んんっ」

まだ加減がわからないのか、喉奥にまでずっぽりと差し込んでいるせいで、少し苦しそうに見える。可哀想だが、しかし、きゅっと締めつけるような喉奥の感触は、脳髓がズキズキとするほどに心地よく、つい腰を突き出してしまふ。

「ダメだよ、ひなちゃん、そんなに締めつけたら俺……」

ひなが長い睫をふさりと揺らして大介を上目遣いに見上げた。アイドルグループの一員にいてもまるでおかしくない少女の整った顔が、大きなペニスを啜えて歪んでいるのがいやらしい。

(こんなに可愛らしい子が俺のことを好いていてくれるだなんて、夢みたいだ……) ぐねりと絡みつく舌べろに、先端からとろりと熱いものが滴るのがわかった。ひなも喉奥に大介の体液を感じたのか、一瞬戸惑った顔を浮かべた後、細い喉を鳴らして

こくと飲み下す。

「ひなちゃんつてば、一生懸命にしゃぶっちゃって可愛いわね」

早紀はひなの後ろに回りこむと、後ろから抱え込むように腕を回してシャツを剥ぎとった。ブラジャーのカップからはみだした胸を手のひらで包み込むと、そつと揉みしだく。

「んっ……」

ひなは身体をびくと揺らすと、甘えたような声を漏らした。

「うふふ。ひなちゃんは乳首が性感帯なのよね。触ってあげるわね」

「や……ダメです、早紀さん、恥ずかしい」

ひなは顔は大介のペニスを咥えたまま、頬を真っ赤に染めて小さく頭を横に振った。

「大丈夫よ。ほら、力を抜いて」

「あつ、ああんっ」

早紀はひなの乳房を手のひらで包み込み、親指と人差し指とで乳首をぎゅっと摘みあげた。ひなは身体をくねらせて吐息を漏らすと、自らの身体に生まれた快感に耐えるように、より激しく舌を動かして亀頭の縁を舐め擦る。

「あつ、そこ、気持ちいいところだよ、ひなちゃんッ！」

腰を突き上げてくるような快感がせりあがってきて、少女の口の中でペニスがびくと跳ねた。少女は驚いたように目を丸くすると、再び亀頭のくぼみに舌を這わせ左右にれるろと舐め動かす。

舌が擦れるたびに新しい快感が生まれては淫囊を刺激する。ぐぐぐ、と精液がせりあがり、今にも爆ぜてしまいそうだ。

(ううっ、このままじゃ、マジでイっちゃう……)

しかしまだイキたくない。どうせイクならば少女の中で……。

大介は、衝動に突き動かされるまま、ひなの肩を押して畳の上へと押し倒した。少女の両膝の裏に手を通すと、不安げに揺れるひなと目が合う。

(……いや、でも、やつぱり、まずい……よね)

一瞬、我を忘れてしまったものの、年下の少女の初めてを奪ってしまっていていいものかと、この期に及んで躊躇いがこみ上げてくる。

「……大介さん。ひなの初めて、貰ってください」

大介の迷いを敏感に感じとったのか、ひなが決意を固めた表情でいった。

「ほ、本当にいいの？」

「うん。大介さんに貰ってもらえるんなら、ひな、幸せです」

「本当に……本当にいいんだね？」

ひなは、返事をする代わりに、大介の腰の辺りに手を当てて、ぎゅつと掴んだ。

(よし……じゃあ、なるべく痛くないようにしないと)

大介にしても、決して慣れていないわけじゃない。上半身を起こしたまま、ふわふわとした和毛からうつすらと透けているひなのスリットにペニスをあてがった。控え目な小陰唇を掻き分けると、膣口に亀頭を押しつける。

「んっ、んんっ」

「大丈夫よ、ひなちゃん、痛いのは一瞬だけだから」

ぎゅつと両目を瞑ったひなを励ますように、早紀はひなの額に汗で張りついた髪の毛を掻きあげた。ひなは下唇を前歯でぎゅつと噛んだまま、大介の腰に自らの腰を合わせる。

「ああっ、挿入るっ。ひなちゃんの中に挿入るよっ！」

ゆっくりと腰を突き上げると、めりめりつとした感触とともに、剛直がひなの中にめり込んでいった。

(う、うわあっ、き、キッツ！)

ひなの破瓜の痛みを少しでも和らげようと、努めてゆっくりと腰を沈ませようとし

ていたが、いらぬ心配だった。何者にも侵されたことのないひなの膣道は信じられないほどに狭きつく、たとえ急いで差し込もうと試みたところで、きゅつきゅと締めつけてきて、そう簡単には侵入を許してはくれそうにない。

しかし、その狭道から湧き起こされる快感は格別だった。しっとりとした湿った柔らかい肉で、じんわりと絞るように締める上に、粒だった肉壁がペニス表皮の末梢神経をくすぐるようにざわざわと蠢く。

毎秒一センチにも満たないゆっくりしたペースで、少しずつ、少しずつ腰を沈めていくと、それにともなつて下腹部に甘美な快感が湧き上がってくる。逸る気持ちを持って余しながらようやく奥まで押し込むと、苦悶の表情を浮かべていたひなが薄く目を開けて、ふーつと溜め息をついた。

「大介さん、ひなの中に挿入ったの？」

「うん、挿入ったよ。ほら、わかる？」

ひなに貫通したことを知らせるため、腰を少し引いた後、そつと奥へと突き立てる。「うわあ。挿入っちゃった、ねえ、早紀さん、大介さんのおちんちんが、ひなの中に入っちゃったよお！」

ひなは感激したように涙混じりの声をあげた。

「うん、ひなちゃんの中、すつごく気持ちいいよ。キツくて狭くて、俺のちんちんをぎゅうぎゅうつて締めつけてくる。ねえ、ひなちゃん、大丈夫？ 痛くない？」

「うーん……、ちよつとだけ痛いかな」

「そっかあ……」

どうしたらいいのだろう。

本当は激しく腰を動かしてひなの身体を貪りつくしたい思いでいっぱいだ。しかし、畳の上に横たわったひなの身体はまるで壊れ物のように華奢で、破瓜を終えたばかりの秘部も、かろうじて大介の肉棒を飲み込んではいれるものの、下手に動いては壊れてしまいそうだ。

(どうしよう……)

助けを求めるように早紀に視線を送る。すると、早紀は何もかもわかっているというようにひなの横へと回ると、ゆつたりとした笑みを浮かべた。

「大介くん、ゆつくり、ゆつくり動いてみて。ね、ひなちゃん、もう痛いのは終わってたわ。これから先は気持ちよくなる一方だから安心して大介くんに身を任せて」

ひなは唇をぎゅつと噛んだまま頷いた。

「じゃあ、ひなちゃん、いくよ」

ひなの中の複雑な構造を味わうように、ゆっくりと腰を押し引きすると、ちゅぷちゅぷと愛液が淫猥な水音を立てた。上昇した体温で温められたのか、ひなの身体からシャンプーの香りと思春期特有の甘酸っぱい体臭がブレンドした匂いが香り立つ。

「あ、ホントに……だんだん痛くなくな……んんっ」

ひなが眉根をぎゅつと寄せて小さく鳴き声をあげた。慌てて羞恥の表情を浮かべたところを見ると、気持ちよさからあげてしまった喘ぎだったようだ。

（うわあ、ひなちゃんを感じてくれた？）

嬉しさといとおしさがこみ上げてくる。焦る気持ちを一生懸命に抑えると、細い腰に手を置き、ペニスで膣肉をほぐすようにゆっくりと出し入れする。

「あ……あんっ……んんっ、ひゃんっ」

荒い息に混じって甘い吐息が溢れ出す。

「良かったわ。ひなちゃん、気持ちよくなってきたみたいね。ね、大介くんはどう？こんな若くて可愛い子のおま○こ、本当はすぐにでもイっちゃいそうなほど気持ちいいんじゃない？」

「はい、や、やばいっす！ ひなちゃんのおマ○コ、まじですごい気持ちいいっす」「やんっ、大介さん、そんなこといわれたら、ひな、恥ずかしいよお」

オマ○コという淫語が恥ずかしかったのか、ひなが身体をくねらせた。狭い膣の中でペニスガぎゅうと捻られて愉悅が背筋に奔る。

「うふふ、ひなちゃんつてば、恥ずかしがりね」

早紀は屈みこむと、ひなの唇にちゅつと口づけ、ブラジャーから溢れた胸に手を伸ばしてゆつくりと円を描くように揉みしだく。早紀の細指がひなの乳肉にぎゅうと食い込み、若さ溢れる弾力いっぱい乳肉がふるふる揺れる。

「ああんっ、ダメだよお……そんなことしたら、ひな、また変になっちゃう」

「うふふ。変になっていいのよ、だって、みんなひなちゃんが変わるところが見たいんだもの。ね、大介くん？」

早紀はぺろりと、舌なめずりするように唇を舐めると、わずかに腰を浮かせて前のめり、大介の乳首にちろちろと舌を這わせた。ざわざわとした刺激に背筋が慄く。

「ううっ、き、気持ちいいっ」

失禁しそうな快感に脳の芯がじんじんと痺れる。下半身をみっちり包み込むひなの若膺と、乳首を執拗に這い回る早紀の舌ペロ。一時に別々の性感帯を刺激され、身体がバラバラになりそうに快感を感じてしまう。

（ううっ、腰が、腰がむずむずするっ！）



綾が大介のほうへとぐつと身を乗り出した。両手を膝の上で揃えているせいで、ぐつと胸が寄り、谷間が一層深くなる。

(うわっ、すっごい……深い)

さつきからずつと目の前にあるにもかかわらず、ちつとも見飽きることもなければ、見慣れもしない超ド級の突き出しに、視線を奪われていると、

「こらっ、大介くんってば、今、綾さんの胸、覗てたでしょ」

隣の早紀が手を伸ばしてきて、大介の頬を包んだ。そのまま早紀のほうへと強制的に向かされる。

「あっ、そんな、いや、覗ていたとかじゃなくって……」

「嘘。バレバレよ……ねえ、じゃあ、わたしと綾さんだったら、どっちがタイプ？」

凶星をいい当てられてドギマギしていると、早紀がからかうような視線を大介に向けていった。

(ええっ、どっちがタイプって……)

この状況でどちらかを選ぶことなんてできやしないし、明るく澁刺とした綾と、しつとりと妖艶な早紀。正直いってどちらも、選びがたい魅力に溢れている。

(ううっ、なんていって切り抜ければいいんだろう)

どう答えればいいのか、困っていると、じつと黙って早紀と大介とのやり取りを聞いていた綾が口を開いた。

「ねえ、もつと、具体的な質問のほうが答えやすいんじゃない。そうね、例えば……もしも今夜、どっちかを相手にするんだったら、奥宮くんはどっちを選ぶか、とか？」
「ちよつ、綾さんまで、何いってるんすか。どっちか相手って……」

少し酔っているのだろうか。気がつけば、今日、封を切ったばかりだったはずのウイスキーのボトルの中身は、ほとんど空になっている。

（この状況で、どっちを選んでも角が立つし、そもそも、ふたりとも、ずいぶん酔っ払ってるみたいだし……どうしよう）

ほろ酔いを通り越して、すっかりできあがってしまったている様子ふたりに、どうしたものかと上手い答えを探していると、

「ねえ、大介くん。綾さんのおっぱいは確かにすごいけど、わたしだって、ほら、なかなかのものでしょ。どう？」

と、早紀が大介の手を取って、自分の胸元へと導いた。スーツの上からでも、ふりと柔らかな感触に指先が痺れたように震え、胸がドキドキと鼓動する。

「あらあ、ずるいわ。早紀さんってば、奥宮くんを独り占めして。ね、奥宮くん、わ

たしのおっぱいはどうかしら？」

手のひらにふにふにと柔らかな早紀の乳肉の感触を受けながら頷くと、綾がもう片方の手を取って自分の胸へと導いた。

こちらは胸元が開いたワンピースのせいで、もろ肌に指先が触れてしまう。しつとりと手のひらに吸いつくような肌触りと、ホイップしたての生クリームのように柔らかでいて、持ち重りする感触が心地いい。

「む、む、む、無理ですよおっ！綾さんも早紀さんも素敵すぎて、選べっこありません！」

思わず本音を漏らすと、綾と早紀とが顔を合わせてにこりと微笑んだ。

「うふふ、大介くんってば、素直で可愛いよね、ねえ、綾さん、よかつたら大介くんのこと、ふたりで可愛がってあげない？」

「うーん、もちろん、わたしはかまわないけど、奥宮くんはどうかしら」

「えっ、お、俺っすか!？」

「そうよ。ね、三人で気持ちいいこと、してみない？」

綾が誘うようにくねっとシナを作る。

(さ、三人でって……)

早紀とひなとでした過ぎたような淫らな時間を、またも過ぎせるといふのか。しかも、今度は早紀と綾という成熟したふたりの女性が相手だ。前よりも一層いやらしいめくるめく行為がくりひろげられるに違いない。

(しょ、正直にいつて、やりたすぎる……!)

気恥ずかしさもあるが、積極的な綾と早紀に物怖じしては、何も始まらない。「で、では……お願いしますっ!」

「うふふ、お願いします、だなんて、大介くんってば本当に可愛いわ」

大介の首元に早紀は腕を絡みつけ、唇を寄せて頬っぺたにちゅつとキスをした。「じゃあ、わたしはこっちから……そうね、さっきの続きをしようか」

綾は丸椅子から立ち上がると、テーブルを脇へとどかして大介の足元に跪いた。

「あらあ、なあに。綾さんってば。何？ 続きって」

「うふふ、ごめんなさい、さつきはイヤリングを落としたなんて嘘をついちゃったけど、本当は奥宮くんのおちんちんをおっぱいで弄ってあげるところだったのよ」

「やだあ、綾さんってば、ずるいわあ。今日は大介くんはわたしを誘ったんだからあ」

「ごめんなさい、早紀さん。知らなかったのよ。でもいいじゃない。三人で仲良くスケベなことしましょう、ね、奥宮くん」

綾がすつと視線を下げると、眼が半分ほど閉じた妖艶な表情になった。大介のズボンのチャックに手をかけ、さらにトランクスを降ろすと、ドレスの胸元と派手な豹柄ブラジャーをぐいと下げる。すると、大介のバストがぼろりとはみだして、大介の膝の上でぼよんとバウンドした。

「うふふ、じゃあ、いくわね」

綾は、零れ出た形のいいバストを、両手で下から持ち上げると、大介のそそり立ったペニスをふんわりと包み込んだ。しっとりとした乳肉に肉棒が挟み込まれ、臈丸にぎゅつと痺れるような甘い疼きが奔る。

(う、うわあ、や、柔らかいッ)

熱く滾ったペニスをふんわりと包み込む、しっとり滑らかな軟肉は、まるで極上のババロアのような。白く清らかな肌と、グロテスクに怒張した赤黒いペニスの対比もいやらしく、大介の牡を刺激する。

「うふうん。奥宮くんのおちんちん、カッカしてる。熱くて硬くてドクドクって脈打ってるのが、心臓まで伝わってくるみたい……」

ペニスから放たれる牡臭に、綾はうつとりと目を潤ませ、乳房を抱えた両手を下側から上へとゆつたりゆつたりと動かして大介の陰茎を刺激する。手のひらからはみだ

した肉がぐつと上に盛り上がり、たふんたふんと波打つ様は、ダイナミックかつ劣情をそそる光景で、大介の性感は否応なしに高まっていく。

「気持ちいいのは、おちんぼだけじゃないんだぞ。ねえ、知ってる？ 本当は身体の全身が性感帯なのよ」

早紀のやや掠れたセクシーな声色が鼓膜をくすぐったと思うと、耳穴にぬるりとした感触が這った。続けて耳朶に、ぞわぞわと鳥肌が立つような快感と、ぴちよぴちよと脳髓を刺激する卑猥な水音が響く。

「ひゃうっ、ううっ、うくっ……」

ふたりがかりで責められているとはいえ、声をあげてしまつては恥ずかしい。必死に耐えようと口をつぐんでいる大介のポロシャツを、早紀がめくりあげる。

「うふふ。大介くん、ここは感じるかしら」

バンザイのポーズで脱がされると、露わになつた上半身の胸板の、ぼちりとした乳首に早紀が手を伸ばし、人差し指の腹で軽く左右に撫で擦つた。

「あつ、ひゃうっ」

こそばゆいような、それでいて首の裏がじんじんと痺れるような愉悅が広がる。指先で下からぴんっぴんっつと弾かれると、みるみる充血して硬くなつてしまった。

「あらあ、乳首も勃起しちゃったわ。んふふ。敏感で可愛いわね、大介くんの乳首」

早紀は大介の右乳首を、左手の親指と人差し指とでダイヤルを捻るようにきゅつきゅと揉みあげながら、左の乳首へと舌を這わせた。生温く、ぬめりとした舌ペロがペロペロと大介の小突起を這い回り、ジンジンと響く甘美な痺れが肩を震わせる。

「本当、奥宮くんの身体って敏感だわ。早紀さんに乳首を舐められたら、ほら、おちんちんの先っぽから、カウパーが出てきちゃった」

豊乳に半ば埋もれた自分のペニスに目をやると、先端が透明な液体でぬらぬらと光っていた。先走りというには多すぎる量なのが恥ずかしくて頭がくらくらとする。

「だって、乳首なんて弄られたの、初めてで、俺……。それに、綾さんのおっぱいもすごいし……」

「うふふ、いやらしい身体の男の子、大好きよ」

綾が浮き出したカウパー溜まりを絞るように、胸を支えた両の手のひらにぐつと力を入れた。すごい量感の胸肉がむぎゅつと中央に押し寄せられ、ペニスをぐいぐいと優しく締めつける。

綾の乳肉の圧に押し出され、ちゅぷりと透明な粘液が溢れて、亀頭へと零れ落ちた。そこへすかさず綾が乳肉を揺らすものだから、カウパー液はみるみるうちに綾の谷間

までも流れ、綾の綺麗な肌を汚してしまった。

(ああっ。俺のちんぼ汁が綾さんのおっぱいに……)

本来は子供のためにある聖なる乳を汚してしまった背徳感は、さらに大介の欲望を掻きたてるのだから始末に負えない。

「ああん、大介くんのおちんちんってば、すっごく大きくなっちゃってる。ねえ、わたしも触ってもいいかしら」

「ええ、早紀さん。ふたりで一緒に奥宮くんのおちんぽを弄っちゃいましょう」

カウパーで照り光る真っ赤に怒張した男根を見て、早紀がたまらないとばかりに悲鳴をあげた。綾が身体をずらすと、早紀はソファから床上へと身体を降ろし、膝立ちになって綾の隣へと並ぶ。

「ありがとう、綾さん。優しいのね。ねえ、綾さん、もうひとつお願いがあるの。実は、わたし、女の人も嫌いじゃないの。だから、綾さんの身体、触ってもいいかしら」

早紀は、はにかんだ笑みを浮かべて綾をちらりと見上げた後、照れを隠すように大介のペニスに唇を寄せた。

「やだ、早紀さんってば、女も嫌いじゃないだなんて、スケベだわあ」

突然の早紀のカミングアウトに、綾は少し驚いた顔を浮かべた後、呆れたようにい

うと、早紀の舌奉仕に遅れまいと自らも大介の屹立に舌を伸ばした。

ふたりの熟女は時に互いに競いあうように、時にペアダンスを踊るように息を合わせて大介のペニスを愛撫する。

早紀が根元から亀頭の段までをじつくりと舌腹で舐めあげれば、綾は長く突き出した舌の先で鈴口をちよろちよろと舐る。綾が陰囊をぱくりと啜えこんで口の中で転がせば、早紀は手で綾が支えた男根の亀頭部分にローリングするように舌を這わせる。

(う、うわあっ……女の人って、こんなにいやらしい生き物なんだ)

ふたりの口奉仕の巧みさは、さすがに年を重ねている分だけ熟練していて、少しでも油断すると、たちまち精子がせりあがり、外へと放出されてしまいかねない。

(ああ、もつと、もつとふたりのいやらしい姿が観たい)

ひとりだけ全裸という羞恥も心がざわざわするようで、快感を掻きたてるひとつの要素ではあるけれども、綾と早紀の綺麗な身体と淫猥な乱れ方を見てみたい思いが勝った。

「綾さん、早紀さん、ちよつと、ちよつと待ってください」

大介は綾と早紀の頭に手のひらを置くと、ふたりの奉仕を一旦ストップさせた。

「なあに、どうかしたの、大介くん」



この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

<http://ktcom.jp/>

- ◎雑誌、コミック、小説の通信販売もやってるよ! 19日発売!
- ◎二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルのパックナンバーも買えるよ!
- ◎ジャンル別で作品も選べて超便利!
- ◎二次元編集部のお愉快的Blogも更新中!



KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・cranberryをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!